

触媒学会会長メッセージ

(京都大学大学院工学研究科 教授) 田中 庸裕

(1) 会長メッセージ

基礎から応用まで多岐にわたり、分野を超えて境界領域を拡げ、様々な研究や技術開発が存在することが触媒学会の強みです。また、「触媒」というキーワードから、基礎研究から inspired, 発展された、その出口成果が社会還元される姿が具体的に見えるのも本学会の強みです。それらの強みも、次の世代が育たないと未来には成り立ちません。若い人たちへの学会活動への積極的な参加と意見を吸い上げることが必須でしょう。特に、10年後の触媒学会をリードする中堅会員の産学をまたがる学会活動や人的交流を促すことが極めて重要です。そして、この強みを世代を超えた会員の皆様方と分かち合いたい。



(2) 使命と現状の課題

触媒研究の基盤は、新規材料の発見や新規反応の発見、その反応機構の解明にあり、これらを礎において、世界の課題を解決していくことが使命である。環境、エネルギーに関わる研究や技術のうち、触媒作用が重要な役割を担うものが夥多である。一方、我々に提示されてくる喫緊の課題は、多岐にわたり、ともすれば、場当たりの研究や、意味もなくブラックボックスという触媒「材料」を探し出すことに流れていることがある。これでは、一つの発見が限定された一つの課題解決につながっても、学術上実用上波状的拡がりや新たな概念の出現はそうは見込めない。

(3) 現学会は蝸壺化、閉塞感はないか、最新研究・教育の場となりえるか

触媒学会の会員は、多くは、複数の学会の会員でもあり、個人ベースで適度な研究の出入りが行われているものであると思う。閉塞感はないが、蝸壺感があるとすれば、純粋に学問ベースで戦わねばならない場であるにもかかわらず、技術開発ベースの委託公募研究が多すぎて、単なる「材料開発」の温床になっていることである。それらの研究結果の公表には制限があり、キイになる会話・討論が十分なされないことがある。最新研究の場には一部なりうるかもしれないが、教育という意味では物足りないものがある。これは、ものづくりを研究の重要な部分にしている学会では押し並べてそうであり仕方のないことかもしれない。

(4) 政策提言・要望

(5) 化学連合に期待すること

研究経費には多くのプロジェクト公募研究があり、これらは個人あるいはチームベースで獲得されるべきものでありこれに文句を言うつもりはない。これらの中でも科研費に代表されるような基盤ベースの研究費のさらなる増額は望めないものだろうか。連合として世に言うロビイスト活動を高めてこれらの引き上げを実現できることを祈りたい。